

2022. 5. 15 (日) 使徒 1 : 6 ~ 8

1:6 そこで使徒たちは、一緒に集まったとき、イエスに尋ねた。「主よ。イスラエルのために国を再興してくださるのは、この時なのですか。」

1:7 イエスは彼らに言われた。「いつとか、どんな時とかいうことは、あなたがたの知るところではありません。それは、父がご自分の権威をもって定めておられることです。

1:8 しかし、聖霊があなたがたの上に臨むとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリアの全土、さらに地の果てまで、わたしの証人となります。」

<説教>

私たちの主イエス・キリストは、私たちの罪のために十字架で死んでくださり、三日目によみがえられた後、四十日にわたって使徒たちに現れ、ご自分が生きておられることをお示しになり、神の国のこと、ご自身のことをお語りになりました。(3)

そのようにして使徒たちと一緒にいるときイエスは彼らに、「エルサレムを離れないで、わたしから聞いた父の約束を待ちなさい。ヨハネは水でバプテスマを授けましたが、あなたがたは間もなく、聖霊によるバプテスマを授けられるからです。」とお命じになりました。(4-5)

そのイエスのみことばを聞いた弟子たちが、またイエスと〈一緒に集まったとき〉に〈主よ。イスラエルのために国を再興してくださるのは、この時なのですか。〉と〈イエスに尋ねた〉のでした。(6)

そのとき使徒たちはイエスが十字架で殺されたけれども死人の中からよみがえられたことを信じており、イエスが〈天においても地においても、すべての権威が与えられて〉いる(マタイ 28:18)お方であると聞かされており、そういうイエスに対する信仰と期待は確かに持っていました。

それで、そのイエスがいよいよその権威と力を発揮して、憎き異邦人のローマ帝国を滅ぼし、自分たちイスラエルの民を解放し〈イスラエルのために国を再興してくださる〉時がついに来た、それが〈この時なのですか〉と鼻息も荒く尋ねたのでしょう。

確かにイエスに対する信頼と期待が弟子たちのうちに新たにされたという点では一歩前進と言えるかもしれませんが(何と言っても彼らがつい 40 日ほど前にはイエスに失望し、皆自分のいのち惜しさにイエスを知らずイエスと何の関係もないふりをし、イエスを見捨てて逃げていたのですから)。

とは言え、彼らがイエスをまだまだ「自分たち、ユダヤ人たちだけの王」としか考えておらず、「あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。…」(マタイ 28:19)とのイエスのみことばの意味もまだそのときは深く考えてもおらず、よく分かってもいなかったことも事実だったでしょう。

それでもイエスは彼らのそんな誤った「選民意識」、「民族エゴ」を正すことはここではひとまず置きつつ、〈「いつとか、どんな時とかいうことは、あなたがたの知るところではありません。それは、父がご自分の権威をもって定めておられることです。」〉と言って彼らをたしなめられました。

イエスが〈イスラエルのために国を再興してくださる〉その〈時〉だけでなく、天の〈父

がご自分の権威をもって定めておられること（複数形）で、〈それ（ら）〉が〈いつとか、どんな時とかいうこと〉を使徒たちに知らせようとしていないことまでも使徒たちは知ろうとしてはならないとイエスは戒められました。

そして、使徒たちがイエスから受けるべき第一の任務は、何事かが、いろいろなことが〈いつとか、どんな時とかいうこと〉を〈知る〉ことではなく、彼らの罪のために十字架で死なれてよみがえられたイエスの〈証人〉となることだとイエスは言われました。

この後の「使徒の働き」を見れば分かるようにイエスの〈証人〉となることは、決して簡単で安楽なことではなく、文字通り「命懸け」のことなのです（〈証人〉と訳された言葉「マルトゥス」は後に英語の殉教者（martyr）の語源となりました）。

私たち人間は皆自分の身を守ろうとし、自分の損得・利害をすぐに考える者です。

一般的に何かを「証言」するという場合でも、それで別に自分や家族とかに不利や危害が及ばなければ簡単にできますが、自分が聞いたり見たりした本当のこと正直に証言することで自分や家族に何か危害が及ぶとなると、またはそういうことを予想するだけで、またはそう脅迫されたりすると、私たちは黙るか、そうでなければ偽証をするような者です。

そのことは「イエスの証人」となろうとするときも同じでしょう。

そんな私たち人間の「生まれながらの本性」「人情」そして「悪魔の誘惑」に打ち勝って「イエスの証人となる」となるためには〈聖霊〉の〈力〉が絶対に必要なのです。

だからイエスは「**聖霊があなたがたの上に臨むとき、あなたがたは力を受けます。そして、…わたしの証人となります。**」と言われたのです。

〈臨む〉とは自分よりも圧倒的に強い何者か何事かがその人のところに来る、その身に起こる、巻き込むというような意味です（ルカ 1:35、11:22、21:26、使徒 8:24、13:40 等）。

また、〈力〉（ドゥナミス）とは「奇跡」（マタイ 7:22、使徒 8:13 等）、「しるし」（使徒 2:43 等）とも訳される、つまり人間の思いや力を遙かに超え、それらを粉々に「打っ壊す」神の圧倒的な力を意味する言葉です（「ダイナミック」や「ダイナマイト」の語源）。

そんな〈聖霊〉なる神の〈力〉を受ける使徒たちが、彼らの中にしつこく残っている「選民意識」や「民族エゴ」に打ち勝って〈エルサレム、ユダヤとサマリアの全土、さらに地の果てまで、わたしの証人となります〉とイエスは言われ、約束してくださいました。

使徒たちは皆自分の身といのちこそが大事で、弱く臆病な者でしたから、彼らが自分の力でイエスの証人と「なる」と言うなら、それは全く不可能なことでした。

しかし、〈聖霊〉なる神の圧倒的な〈力〉を〈受け〉ると皆イエスの〈証人〉と「なる」（直訳「である」）とイエスは言われたのです。

そのイエスの約束のみことば通りに使徒たちがもやは人間を恐れず神だけを恐れ、あらゆる不利、損、困難、脅し、誹謗中傷、迫害を、そして民族、言葉、風習、地域の壁を乗り越えてイエスの〈証人〉として生きたことをルカは「使徒の働き」に書き記しました。

使徒たちのこの〈力〉あるイエスの〈証人〉としての働きは彼らの努力や修行の賜物ではなく、ただ〈父の約束〉により、〈父がご自分の権威をもって定めておられ〉たとき即ち〈五旬節の日〉（2:1）に彼らの〈上に臨〉まれた〈聖霊〉の〈力〉によるものでした。

「使徒の働き」に記されている〈地の果て〉はローマまでですが、今やローマどころか「極東」の私たちのところにまで、「使徒の働き」ほか〈聖霊〉の〈力〉によって使徒が書いた福音書、書簡がイエスのことを証言する聖書として届いています。

私たちはこのイエスの〈証人〉である使徒たちによるキリスト証言の書、聖書からイエス・キリストのことを知り、イエスが私たちの罪のために十字架で死なれ、よみがえられたことを知って、イエスを信じ、主と告白しています。

「聖霊があなたがたの上に臨むとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリアの全土、さらに地の果てまで、わたしの証人となります。」

主イエスは、使徒たちに対してのと同じように今日も弱く罪深く臆病な私たちに〈聖霊〉を約束し、その〈力〉を約束し、〈わたしの証人〉の務めに召してくださっています。

感謝と喜びをもって主の召しに応え、精一杯イエスの〈証人〉の務めを果たしましょう。